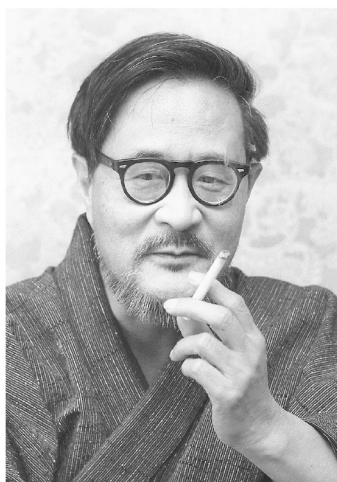




作家・武田泰淳
(共同通信社提供)

武田泰淳とAI

～没後50年に寄せて～

いのうえ たかし
白百合女子大学教授 井上 隆史

戦後文学を代表する作家の一人、武田泰淳が亡くなって、今年10月5日で50年になる。代表作は、難破船の船長が餓死した船員の肉を食べたとされる実際の事件に基づく小説「ひかりごけ」で、三國連太郎主演による映画版のほか、舞台版もある。ほかに、漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された歴史書『史記』を現代の視点で読み直す評論『司馬遷』、朝鮮戦争勃発（1950年6月25日）の後、サンフランシスコ講和条約発効（52年4月28日）によって独立を回復した日本・東京の世相を描く小説『風媒花』などが、よく知られている。

□ AIに聞く □

よく知られていると書いたが、いずれも重厚な内容で、気軽に読める作品とはいえない。しかし今年、私は勤務先の大学（白百合女子大学）の1年生の文学入門の授業のテキストに、あえて泰淳の『風媒花』を選んだ。

助けとなるのはAIだ。例えば主人公の小説家がPD工場で講演をする場面がある。その工場は、中央線のM駅から支線に乗ってT駅の近くにあるという設定なのだが、数年前の大学生なら、この段階でつまづいて、それ以上、作品を読み続けるのが困難だった。しかし今は、AIに聞けばよい。

「PDはProcurement Demand（調達要求）の略で、主に占領期にGHQ（連合国軍総司令部）が正式に『PD工場』に指定されていたかどうかは確認できません。しかし、GHQ/SCAPの原資料、米国立公文書館RG3

31に、1950年7月から9月にかけてのFuji Kogyo 98-002-07」という会社別ファイルが残されていることは分かります。つまり、作中の地理に近い富士工業三鷹工場が、実際にGHQの管理・調査対象となっていたところまで

□ AIで動画化 □

あるいは、『風媒花』作中には、次の漢詩が引用される。

長夜、春を過すに慣るる時
婦を撃へ難を將り髪に絲有り
夢裏に依稀たり慈母の涙
城頭に爰幻す大王の旗
朋輩の新鬼と成るを見るを忍び
怒つて刀叢に向ひ小詩を覓む
吟じ罷んで眉を低うして写すに処
なく

月光、水の如く緋き衣を照す
月光、水の如く緋き衣を照す

月夜、春を過すに慣るる時
婦を撃へ難を將り髪に絲有り
夢裏に依稀たり慈母の涙
城頭に爰幻す大王の旗
朋輩の新鬼と成るを見るを忍び
怒つて刀叢に向ひ小詩を覓む
吟じ罷んで眉を低うして写すに処
なく

□ ハルシネーション □

ところで、AIに関しては、「ハルシネーション」ということがよく問題視される。事実ではない情報を、あたかも事実であるかのように

小説『風媒花』では、先にふれた小説家の講演直前に、工場内で毒物による無差別テロ事件が起る。史実においてはどうか。

『風媒花』の連載は1952年11月号の雑誌『群像』である。この間、皇居前でデモ隊と警官隊が衝突する血のメーデー事件が起った。朝鮮戦争に関連した軍需物資輸送反対、軍需工場化反対運動としては吹田事件、枚方事件があり、特に枚方事件では時限爆弾が爆発した。問題の三鷹工場でも労働争議が起っている。

『風媒花』は、こうした事態と並行して連載された小説なのだが、毒物による無差別テロという事件は、実際には起きていない。言ってみれば、これは泰淳の小説家の想像力が生み出した「ハルシネーション」なのである。

学生たちは、普段こういうストーリーの小説にふれることがないので、最初は皆驚く。しかし、当時の時代状況を調べていくと、小説に書かれていることを偽情報と言いきってしまつてよいものか、次第に考え込み始める。

むしろ泰淳は、サンフランシスコ講和条約発効によって独立したとはいえないが、実質的には、米国の極東軍事戦略の一翼を担う新生日本社会のあり方に対して人々が抱いていた疑問や問題の複雑さを正確に捉え、事実以上にリアル

に時代を表現したのではないだろうか。
調査前の学生たちは、血のメーデー事件や吹田事件、枚方事件のような史実があったことを全く知らず、むしろ、終戦後の焼け野原から、戦後日本が急速に復興したという明るいイメージを抱いている。いや、これは若者に限った話ではないだろう。大人たちの脳裏からも歴史上の事実の記憶は容易に消え失せ、結果的に、ありもしないことをあると思ひ込んだり、実際に起ったことをなかったと言ひ張るような事態が生じる。そうだとすれば、偽情報という意味での「ハルシネーション」に陥っているのは、AIではなく、むしろ人間なのである。

考えてみれば、現代世界はいくつかの陣営に分かれて、その間では紛争、戦争が絶えることがない。これも、それぞれの陣営から見れば、相手方は「ハルシネーション」に捉われているとはいえないであらうか。

没後50年、まさか武田泰淳は、自分の作品についてのレポートが、学生の手によってAIで動画化されるなどとは思ひもよらなかったであろう。だが、人間こそ偽情報という意味での「ハルシネーション」に容易に陥るということについては、泰淳は既に見抜いていたように思われるのである。